

2021

使い易い食器類の研究と制作

Easy To-Use Tableware Research

AD28 西野 希
指導教員 竹内 明

1. 研究目的

万能食器や子供用の食器など、それぞれ種類にバラつきが出てきがちな食卓において、お年寄りから子供まで皆が「使いやすい食器の研究・提案」をする。食事中の事故を防ぎ、安全且つ安心して使える食器を提案し、皆が揃って同じ食器を心地よく使うことで、家族の団欒が広がることを目標に設定した。

2. 調査と分析

▼直接食事場面を観察し、考察。問題点の抽出と共に仮説の立案をした。

・頭で思っていることと身体の動作が一致せず手から滑り落ちるような事故が多いことが判明した。また丸く滑らかな食器は滑る危険性が高く、手に馴染むだけではまだ滑り落ちる危険があると感じられた。馴染む表面に加え、減り張りの効いた掴みどころのある形状で滑りにくさを解消できるのではないかと考察した。

3. コンセプトの立案

「FIT」

- ・凝りが無く、心地よく使用できる。
- ・手から滑らず馴染む形。
- ・アクセントでキッカケをつくる。

4. デザイン展開

飯椀、汁椀、箸を対象にアイデア展開を行い、それぞれの改善点を挙げモデルを数種類生産し検証、インタビューの結果を踏まえ更に展開を繰り返した。

■箸

持ち手の部分にきっかけを作り、正しい位置に誘導できる形状を検討した。多角形と曲面の変化を活かし手に自然と馴染むようにした。

■飯椀

片手に持った時にフィットし、箸を椀に入れたときに手首の負担を軽減できるように高さを低めに設定した。また様々な持ち方に対応できるように高台部分に窪みを作り滑りにくくするように変化を加えた。

■汁椀

汁物の事故防止の為に重心を下げ安定感を重視し

た。また持つときに当たる面に窪みを持たせ滑りにくい表面にした。口に当たる面は滑らかな曲線を付け使用したときに心地よい形を目指した。

・この三つに「面、角」による統一感を持たせ、また表面は強度と耐性に優れた漆塗りを施し、安心して使える食器を目指した。



5. 完成図



6. 結論

制作したモデルを実際に使ってもらい検証した。お箸は、窪みがフィットし持ち易いと評価されたが予想より短めに持ってしまう人も居た。正しい持ち方で持ってもらおうと納得して貰えたが、幅広い人それぞれの持ち方に対応が出来ていないと感じた。飯椀は外形面が手に馴染むが、内側が浅いため入れるものによっては零してしまう危険性があり、内容量の少なさも見直す必要があると感じた。汁椀は安定感を出す為に重心を低く設定したことで零れにくくなったが、高台の高さが減ったことで指が窮屈に感じた人も居た。手に持ったときに指に当たるひっかかりは、滑りにくくホールド感があると評価された。

全体を通して、器具に何らかのキッカケを持つことで滑りにくくなり安全性が高まったと感じられたが、形に変化を加えることで使い方によっては慣れない操作になることも分かり、更なる発展性と改善の余地を感じた。

7. 参考文献

高橋隆太「究極のお箸」三省堂

青柳恵介「ふだんづかいの器」芸術新潮 新潮社

<http://www.athome.co.jp/news/questionnaire/sh>